

(22) 以下の通り訂正いたします。

P226 共同発表者追加

誤

193) 看護学生によるカラージュ療法の実施を試みて
ー内面と外面の分析結果と対人関係測定を比較してー

○松川泰子¹

¹ 森ノ宮医療大学

【目的】

看護学生によるカラージュ療法の分析結果と対人関係測定の結果を比較し、その実態を把握することを目的とする。

【方法】

平成25年4月～7月に開講したカウンセリング論(全15回)を受講した看護学科2年生28名(男性4名,女性24名)を対象とした。講義の2コマ(180分)を用いて看護学生がカラージュ療法を実際に行い、その後、西平(1964)の基本的対人態度測定インベントリーを実施した。

カラージュ療法は、心理療法の一部門である芸術療法の中の一技法である。B4サイズの画用紙を台紙として、雑誌や新聞、パンフレットの中から自分の心惹かれるもの、心にひっかかるものを選び出して切り抜き、台紙の上で構成し、思うような構成ができたところで糊付けをすることとした。看護学生は、自身の内面と外面を示すカラージュを各1枚作成した。作成に集中できるように、学生間の距離を十分に確保し実施した。基本的対人態度測定インベントリーは30項目の質問で構成される。集計の結果、g/p値が1.5よりも高ければ対人関係において人格の良い面が生かされやすく、1.5よりも低ければ対人関係において人格が否定的に働きやすいことを示す。

得られたデータの分析は、カラージュの分析と質問紙の集計結果の評価を老年看護学の研究者2名で行い妥当性の確保に努めた。

倫理的配慮として、学生に対して個人情報の保護と評価に影響しないことを説明し、同意を得た上で実施した。その際に、研究への参加は自由意思であり、参加の拒否や中断は可能であることを説明し、提出をもって同意とした。同大学研究倫理審査委員会の承認を得た。

【結果】

研究に同意が得られた協力者は19名(67.0%、男性2名、女性17名)であった。g/p値の平均値は 1.57 ± 0.68 であった。g/p値が1.5以上の学生は8名(女性8名)、1.5未満の学生は11名(男性2名、女性9名)であった。内面を表すカラージュに、緑環境や青空等の自然風景の写真を選択した学生の割合は、g/p値が高値の学生では8名中4名(50.0%)であり、g/p値低値の学生では11名中2名(18.2%)であった。また、人物の写真を選択した学生の割合は、g/p値が高値の学生では8名中3名(37.5%)であり、g/p値が低値の学生では11名中6名(54.5%)であった。

【考察】

カラージュ療法は内面を表出できる方法の一つであることから、学生の内面を窺い知ることができた。基本的対人態度測定インベントリーの値とカラージュ療法とを比較したところ、明らかな差異は認められなかったが、今後、継続的に実施し、対象者数を増やして比較・分析を行う必要があると考えられる。

一方、臨地実習等で患者との関係性の構築に困難を感じる学生も見受けられるため、今後、学生の学修過程を見ながら、支援していく必要性が示唆された。教育的配慮の一助として役立つ可能性も考えられる。

正

193) 看護学生によるカラージュ療法の実施を試みて
ー内面と外面の分析結果と対人関係測定を比較してー

○松川泰子¹、上西洋子¹

¹ 森ノ宮医療大学

【目的】

看護学生によるカラージュ療法の分析結果と対人関係測定の結果を比較し、その実態を把握することを目的とする。

【方法】

平成25年4月～7月に開講したカウンセリング論(全15回)を受講した看護学科2年生28名(男性4名,女性24名)を対象とした。講義の2コマ(180分)を用いて看護学生がカラージュ療法を実際に行い、その後、西平(1964)の基本的対人態度測定インベントリーを実施した。

カラージュ療法は、心理療法の一部門である芸術療法の中の一技法である。B4サイズの画用紙を台紙として、雑誌や新聞、パンフレットの中から自分の心惹かれるもの、心にひっかかるものを選び出して切り抜き、台紙の上で構成し、思うような構成ができたところで糊付けをすることとした。看護学生は、自身の内面と外面を示すカラージュを各1枚作成した。作成に集中できるように、学生間の距離を十分に確保し実施した。基本的対人態度測定インベントリーは30項目の質問で構成される。集計の結果、g/p値が1.5よりも高ければ対人関係において人格の良い面が生かされやすく、1.5よりも低ければ対人関係において人格が否定的に働きやすいことを示す。

得られたデータの分析は、カラージュの分析と質問紙の集計結果の評価を老年看護学の研究者2名で行い妥当性の確保に努めた。

倫理的配慮として、学生に対して個人情報の保護と評価に影響しないことを説明し、同意を得た上で実施した。その際に、研究への参加は自由意思であり、参加の拒否や中断は可能であることを説明し、提出をもって同意とした。同大学研究倫理審査委員会の承認を得た。

【結果】

研究に同意が得られた協力者は19名(67.0%、男性2名、女性17名)であった。g/p値の平均値は 1.57 ± 0.68 であった。g/p値が1.5以上の学生は8名(女性8名)、1.5未満の学生は11名(男性2名、女性9名)であった。内面を表すカラージュに、緑環境や青空等の自然風景の写真を選択した学生の割合は、g/p値が高値の学生では8名中4名(50.0%)であり、g/p値低値の学生では11名中2名(18.2%)であった。また、人物の写真を選択した学生の割合は、g/p値が高値の学生では8名中3名(37.5%)であり、g/p値が低値の学生では11名中6名(54.5%)であった。

【考察】

カラージュ療法は内面を表出できる方法の一つであることから、学生の内面を窺い知ることができた。基本的対人態度測定インベントリーの値とカラージュ療法とを比較したところ、明らかな差異は認められなかったが、今後、継続的に実施し、対象者数を増やして比較・分析を行う必要があると考えられる。

一方、臨地実習等で患者との関係性の構築に困難を感じる学生も見受けられるため、今後、学生の学修過程を見ながら、支援していく必要性が示唆された。教育的配慮の一助として役立つ可能性も考えられる。